



キトラ古墳の調査

2002年にキトラ古墳の墳丘を調査したが、仮設保護覆屋の完成までは石室を密閉状態で保存するため、石室南側の墓道1.5m分については手を付けなかった。今回、これをほぼ完掘した結果、石室の前面と墓道奥部の様子がわかり、盗掘時の石室破壊状況も判明した（写真右）。

上下65cm、上幅40cm、下幅25cmの盗掘孔を通して石室内部を観察したところ、壁面の漆喰の状態は極めて危機的だった。保存処置の前に、壁画の各種写真撮影をおこなった。そのうちの赤外線写真撮影では、東壁奥にある獣頭人身像をはじめて正面からとらえ、十二支の寅と確定できた（写真上）。そのユーモラスな表情には、飛鳥の絵師の技量が遺憾なく発揮されている。が、輪郭線にヘラ描き線がみとめられるなど、描法についての謎は一層深まった。

本文72頁参照（撮影：井上直夫）





西トップ寺院 中央祠堂

西トップ寺院は、中央に1塔と南北に小塔1基ずつを有す3塔形式の小規模寺院である。四方に出入り口と階段を有し、東側には仏教テラスを付設する。周囲は写真手前に見えるラテライト石列で囲まれる。西から。

本文3頁参照（撮影：井上直夫）



クメールの瓦屋根復元

タニ窯跡A6号窯から出土した瓦を使用。平瓦は凸面に短い突帯があり、細い角材の横棧に引っ掛けて留める。クメールロータスを飾る軒先瓦は、丸瓦部が小さいので、後の丸瓦がほぼ完全にかぶってしまう。平瓦列3列で幅は約50cm。

本文6頁参照（撮影：井上直夫）



藤原宮朝堂院東第二堂南半と東門（飛鳥藤原第125次調査）

昨年度の北半に引き続き、朝堂院東第二堂の南半と東面回廊を調査した。調査では、東第二堂の南裏を検出し、建物規模が梁行5間、桁行15間であることが確定した。また調査区東側では東面回廊に開く東門も検出している。手前が東第二堂、奥が東面回廊及び東門。西から。

本文80頁参照（撮影：井上直夫）



藤原宮朝堂院東門（飛鳥藤原第125次調査）

桁行3間、梁行2間、柱間は17尺等間の八脚門と推定される。現在まで確認されている朝堂院東門の中でも最大の規模を持つ。礎石の大きさも朝堂院のものに比べて大きい。北から。

本文80頁参照（撮影：井上直夫）



藤原宮朝堂院東南隅および朝集殿院西北隅

(飛鳥藤原第128次調査)

朝堂院回廊の東南隅と朝集殿院回廊(手前)の接続部。いずれも複廊だが、朝集殿院回廊が1間ぶん西にずれる。朝堂院南面回廊の礎石位置には根石を残す。南から。奥は耳成山。

本文90頁参照(撮影:井上直夫)



川原寺鉄釜鑄造土坑

(飛鳥藤原第119-5次調査)

寺域北限に、創建期の冶金関連工房跡があり、それに重複して鉄釜鑄造土坑が設置されていた。鑄造土坑は径2.8mの隅丸方形で、一部を奈良時代の建物の柱穴によって壊されている。土坑内には、口縁を下にしたかたちで据えられた、径1m近い鉄釜の鑄型が、良好に残っていた。北から。

本文118頁参照(撮影:井上直夫)



石神遺跡（飛鳥藤原第129次調査）

昨年度調査区の北隣接地を調査した。左に藤原宮期の南北道路と西側溝、その西側に石敷遺構がある。中央は天武～持統朝の幅の広い南北溝で、畦の手前には溝の西岸から突き出る堤状遺構がみえる。北から。

本文106頁参照（撮影：井上直夫）



石神遺跡出土木簡

石神遺跡からは、昨年度の調査に引き続き、多くの木簡が出土した。写真は三川(参河)国から貢進された荷札木簡。荷札木簡に記される年紀や地名にはまとまりがみられる。このことは、木簡群の性格を解明する上で大きな手がかりとなるであろう。縮尺2：5

本文106頁参照（撮影：井上直夫）

図版 6



朝集殿院（平城第355次：上写真・346次：下写真）

東区朝堂院に南接する朝集殿院の内庭部と外郭部を調査した。朝集殿院の区画施設が掘立柱塼から築地塼へ変遷することを確認。南面では二時期の掘立柱塼の柱穴を検出した。下層の掘立柱塼の柱抜取穴は深さが2 mに及ぶ。

本文128頁参照（撮影：中村一郎）

朝集殿院の東西幅が、掘立柱塼の時期には、朝堂院に比べて広いことが明らかとなった。東面築地塼の東外側で検出された南北方向の掘立柱塼は、当初の朝集殿院の東面掘立柱塼である可能性が高い。

本文128頁参照（撮影：牛嶋茂）



第一次大極殿院南面築地回廊

(平城第360次)

第一次大極殿院南面築地回廊の西南部分を検出した。これまでの調査とあわせると南面築地回廊西半を全面発掘したことになり、その規模や造営・解体過程がこれまでの知見と共通することを確認した。加えて、築地回廊南側で検出した朝堂院の礎敷が、奈良時代に属する可能性を指摘した。北東から調査区全景。

本文136頁参照(撮影:杉本和樹)



第一次大極殿院内庭部の見切石列

(平城第360次)

第一次大極殿院内庭部で確認されている奈良時代前半の礎敷のうち、中層の礎敷で南を限る見切石列を検出した。見切石列は南側に面を合わせ、築地回廊に沿って東西に連続している。北西から。

本文136頁参照(撮影:中村一郎)





旧大乘院庭園 西小池

(平城第352次)

西小池南池の調査。南池の北岸から東岸、『大乘院四季真景図』に描かれた「ラシマ」とよばれる中島の東半部、「ラシマ」から「連リハシ」によって結ばれた小島と対岸部、東大池と西小池を結ぶ流路の西岸にあたる嘴状の岬などを検出した。この情景は、かつて森蘊により京都桂離宮松琴亭前の天橋立と州浜の關係に類似することが指摘されている。南東から。

本文146頁参照

(撮影：中村一郎)

旧大乘院庭園 東大池西北の陸上部分（平城第365次）

東大池の西北隅に設けた調査区（北区）では、中世後期から近代にいたる各時期の遺構を検出し、庭園の陸上部分が度々造り替えられた様子を確認した。手前に東西礫溝SD8571（1期）中央に南北石列SA8564（3期）とSA8565（4期）がみえる。北西から東大池越しに福智院本堂を望む。

本文146頁参照（撮影：牛嶋茂）



旧大乘院庭園 東大池西南岸（平城第365次）

東大池の池岸は中世以来の積土によってしだいに高く造成されている。東大池の西南隅に設けた調査区（南区）では、岸の造成土の下に広がる礫敷面SX8587を確認し、かつて東大池西南部が現況より西に張りだし、洲浜状の入江を形成していたことを明らかにした。池岸SX8590の汀線の位置で、手前にみえる地山起源の礫層SX8589が途中でとぎれ、礫敷面SX8587に切りかわる。北から。

本文146頁参照（撮影：牛嶋茂）

